

作文コンクール 最優秀賞作品「教師に向かって」

大阪府立桜塚高等学校 2年 藤原詩菜さん

「教師になること。」それが十六歳の私にとって、最も大きな夢であり、目標でもあります。私は今、大きくて、強くて、決して手の届かない二人の背中を追いかけています。

「先生にだけはならない。」

小さい頃から、つい半年ほど前までそう思っていました。私が何年もの間、教師になることを避けていたのには、ある二人の存在が大きく影響していました。その二人とは、“祖父母”です。二人とも、小学校の先生でした。二人とは一緒に暮らしていたため、生徒に向き合うことの大変さや、“学校”という職場の現実、より良い授業をするための惜しみない努力をずっと見てきました。だからこそ、自分にそれをこなす自信がなかったのも、教師という道を避けていた、大きな理由の一つです。

そんな中、去年の夏に祖母が倒れ、冬が来る前に他界しました。祖母はすでに退職していましたが、葬儀にはかつて一緒に働いていた教員仲間など、たくさんの方が参列してくれました。祖母の死後、祖父は全てに対する気力を失いました。祖父も数年前に退職していましたが、再任用として再び教壇に立ちたいと言っていたので、なんとか家族で励まし、祖父は見事、もう一度教師になりました。生きる気力を失っていた祖父が、生きることを決め、前を向いた瞬間でした。しかし、数日後、祖父は辞職しました。闘病中だった祖父は、精一杯勤めましたが、うまくいきませんでした。それでも、祖父はもう一度夢をみて、その夢に誇りをもっていました。そんな姿に、私は心を動かされ始めていました。約二週間後、祖父は急死しました。きっと、体は限界だったと思います。それでも、祖父は精一杯前を向いて生きてくれました。

三月、二人の遺品整理をしました。そのとき、二人の教師であった“証”がたくさん出てきました。授業計画や集合写真、どれもが二人が立派な教師であったことを物語っていました。そして、そのとき私は思いました。

「教師になりたい。」と。

私は、高校で日本史を教えたいと思っています。歴史の上に成り立っている今の日本が、何を学んで、それをどう活かしてきたのか。私たちが決して忘れてはいけない、目を逸らしてはいけない歴史を、未来の子供たちと共有するために、私はもっと勉強をし、幅広く専門的な知識をつけたいと思っています。

拝啓、おじいちゃん、おばあちゃん。私は今、二人の背中を追いかけて、日々頑張っています。そして必ず、二人のような、生徒一人一人に向き合い、生徒を心から愛し、豊富な知識と楽しい授業を生徒の未来に活かすことのできる、立派な先生になってみせます。二人を心の底から誇りに思います。

“夢”をくれて、ありがとう。